教員・学生が見たパラリンピック　東京2020大会

# 総合力でつかんだ二つのメダル

選手、コーチらパラトライアスロン日本代表のメンバーと。前列左端が富川教授

寄稿

東京パラリンピック パラトライアスロンヘッドコーチ
富川理充　商学部教授

## 最高の舞台へ最善の準備

史上初めて1年延期となった東京2020大会。2021年8月24日に幕を開けたパラリンピックも、オリンピックに劣らず連日熱戦が繰り広げられ、9月5日に13日間の日程に幕を下ろした。コロナ禍、また緊急事態宣言発令中の開催には賛否両論巻き起こり、むしろ否定的な意見が少なくなかったと思う。

選手、スタッフともに、そのような状況で是が非でも開催を望んでいたわけではない。それでも開催の可能性がある限りは、その舞台で最高のパフォーマンスを発揮できるよう最善の準備をすることが選手として必要なことと考え、可能な活動は継続して準備を進めていた。筆者はリオ2016大会から引き続きパラトライアスロンの日本代表ヘッドコーチを拝命し、選手のサポートに努めた。選手が5年間の成果を発揮する機会をいただけたことに深謝している。

パラトライアスロンは8月28日、29日の2日にわたって実施された。チーム目標の一つに〝金メダル1を含む複数メダルの獲得〟を掲げていたが、周囲の評価は〝取れてもメダル1〟ではなかったか。実施22競技中、国内での期待度や注目度は決して高くなかったと感じる。NHK BS1で生放送されたが、本学関係者で視聴いただいた方はまれであっただろう。

結果は金メダルには届かなかったものの、選手7人が出場し〝銀メダル1、銅メダル1〟を獲得した。下馬評（筆者の勝手な思い込み）からすると、ヘッドコーチとしてはチームに及第点を与えていただきたい。まさにチーム力、総合力でつかみ取った複数メダルであり、メダルを逃した選手も全員で笑い泣き、喜びを分かち合った。その日のレースをすべて終え、会場内の控え場所に戻りようやくメダルを獲得した選手と会えて抱き合いながら泣いているうちに、どこからともなく拍手が湧き起こっていることに気づいた。海外チームの選手、コーチからも祝福いただき、思い出すといまだにうれし泣きできる、本当に幸せな経験をさせていただいた。

## 全力のハイパフォーマンス

### 「バブル方式」はプラスに

今大会はコロナ感染予防のため、選手村への入村は競技初日の5日前以降に、退村は競技終了後48時間以内に行うこととなっていた。パラトライアスロン選手団は8月23日に入村、30日に退村した。本来であれば、競技終了後もしばらく選手村にとどまり、ほかの競技の応援に赴くことも楽しみの一つである。それが競技間交流を進める上で貴重な機会ともなる。それがかなわなかったことは残念である。

入村後から退村までの期間は、選手村、練習会場、レース会場等の各所を許可された車両で移動するのみ。関係者以外との接触を防ぐ、いわゆる「バブル方式」が取られた。

母国開催は調整等に非常に有利となる一方、選手やスタッフが、選手団や競技団体以外の方々と比較的自由に交流できてしまうことが唯一の懸念材料であった。チームとして集中力を高めていく過程では、時として支障となってしまうからである。そのため、行動範囲が制限される「バブル方式」はプラスに働いたと捉えている。練習環境も国内で勝手がわかっていたため、選手もほとんどストレスを感じていないようであった。ただ、もしも半分でも観客に入っていただけていたら、と今でも考えてしまう。

### 生観戦でこそ感じること

「パラトライアスロンの魅力は？」と聞かれる時がある。回答に窮する質問だ。トライアスロンの延長としての魅力なのか、パラスポーツ（障がい者スポーツとしての魅力なのか、ほとんどがその後者だからである。筆者はあくまで一競技のコーチであり、選手のパフォーマンスがライバルを凌駕するよう、日々のコーチングを試行錯誤して行っているだけである。もちろん、片脚や片腕、腕のみの力で、またサポートがあったとしても視覚が極端に制限された中で、何時間も泳いだり自転車をこいだり走ったりすることがたやすくないことは想像できる。そうはいっても、彼らは同じような障がいのある選手と戦わなくてはならない。そのためにできることに全力を注いでいることは健常者の選手と変わらない。

パラトライアスロンもトライアスロンも、スイム、バイク、ランの3種目を選手がいかに強化し、どれだけのハイパフォーマンスを発揮しているのか、それを体現すること、その姿が魅力だと思っている。その姿を間近で観ると何かを感じられると思う。感じない方もいるかもしれないが、どの競技でもファンとそれ以外の方々がいる。それでも、瞬間の音や声、匂い、周囲の様子、会場の雰囲気、緊張感等は生観戦ならではの醍醐味である。

矛盾するようであるが、さまざまな動画サイトにパラリンピックの各競技や特集が投稿されている。ぜひ視聴していただきたい。少しでも気になる競技があれば、東京2020大会ではかなわなかったが、会場に足を運び何かを感じられるか、何を感じるか、試していただけることを願いたい。

スタート前のメイン会場。スタンドは無観客だった

（とみかわ・まさみつ）専門はスポーツ科学。2012年から公益社団法人日本トライアスロン連合パラリンピック対策チームリーダー。リオパラリンピックでもパラトライアスロンのヘッドコーチを務めた。ワールドトライアスロンパラトライアスロン委員。

---

体験記

# 学生ボランティアに参加して

文・ジャーナリズム学科の2学生

8月に開催された東京パラリンピックに、文学部ジャーナリズム学科でスポーツインテリジェンスを学ぶ学生がボランティアとして参加した。2人に体験記を寄せてもらった。

テコンドー競技の会場でボランティアユニホーム姿の辻さん（左）と雨宮さん

## 雨宮 黎さん（3年次）

### 競技の面白さに興味

ボランティアとしてパラリンピックに参加してみて、5日間があっという間でとても楽しく一生の思い出になり、貴重な体験をすることができました。パラリンピックは障がいのある選手の大会であるが、そうとは感じさせないほど迫力があり、ボランティアをする前と後では障がいについての見方が変わりました。

私はテコンドーのプラカードチームとして、選手の入退場の誘導を行いました。選手の入退場の様子、試合前や試合中の姿を見ると、この大会に懸ける思いや気迫が感じられました。

一番印象に残ったのは、最後にプラカードを担当したイランの女性選手の試合で、残り数秒で逆転勝ちしました。テコンドーは一瞬で逆転できるスポーツであり、テコンドーというスポーツ自体にとても魅力を感じました。今後も機会があれば、テコンドーのボランティアをやっていこうと思います。

最後に、この経験をジャーナリズム学科での学び、今後の就活や人生に生かしていきたいと思います。

## 辻 あゆのさん（2年次）

### 挑み続ける姿見守る

テコンドーのボランティアに参加し、選手の皆さんと接することでたくさんの発見がありました。選手たちは肉体的にも精神的にもとても強いと感じました。それを最も実感したのは、大会最終日女子58kg超級のトルコ対オーストラリアの試合（敗者復活戦）でした。

同じ階級といっても障害の重さや、一階級の体重のふり幅が大きく体格も異なります。この試合の選手の身長差は28㌢もあり、身長の低いトルコ代表選手は最後まであきらめずに戦おうとしましたが、オーストラリア代表選手の一方的な攻撃になり、途中で審判に棄権を告げられて試合は終了。私はトルコ選手の先導をやっていたので、彼女の表情や感情がすごく伝わってきました。彼女は判定後、悔しくて泣きそうになりながらも、人前にいる間は涙をこらえ笑顔で振る舞っていました。

彼女の挑み続ける姿や立ち居振る舞いは、これまで多くの壁を乗り越えてきた強い精神力があったからこそできたことだと、そばで感じました。

最後にこの記事を読み、少しでもパラリンピックに興味を持ってもらえたらうれしいです。